

ここで紹介する授業は、右の写真（94年5月＝ピューリッツアー賞受賞）が新聞発表されてから、何回も授業にかけてきたものである。

（主に高学年にて）

生命尊重から

国際理解教育へ

村上浩一

（熊本市立城西小学校教諭）

〔説明〕

今日は、ピューリッツアー賞をとった写真
というのを見せます。まず、スーダンと
いう国を知っていますか。アフリカにあ
る国です。

地図帳を開かせ、スーダンという国を確認
させる。その後、この写真（朝日新聞）をO
HPにて投影する。子どもたち、「何だ？」
という顔をして眺めている。すぐに写真との
「対話」が始まった。「腹が大きい」「飢え
ている」「あの鳥は何だ？」という具合に

〔指示〕

この写真を見て思ったこと、考えたこ
と、気づいたこと等をノートに箇条書き

にしていきなさい。

まだここではどんな場面なのかを明かさない

5分間程おき、挙手した子どもにどんどん
当てていった。なお、OHPが見えにくい子
は自由に前に移動していいようにしている。

食糧に飢えている。

タカに子どもがおびえている。

病弱な子どもがタカににらまれている。

酸性雨で草木が枯れている。

鳥が赤ちゃんをねらっている。

タカが赤ちゃんを育てている。

戦後、子どもが平和がくるようにと祈って
いる。

異常気象で木々が倒れた。

子どもは死んでいるのでは。

赤ちゃんが穴を掘っている。

戦争があったのでは。

向こうに家が見える。

さすがに、今までの道徳授業を回想してい
るような意見が出てきた。それはさておき、

その後の予想

写真のその後を予想させたい。

〔発問〕

この子は、この後どうなったと思いま
すか。

素早く挙手してきた子にどんどん当ててい
った。道徳の授業では、日頃、挙手できない
子どもが意欲的に挙手してくるのが嬉しい限
りである。次のような意見が出された。

死んでしまった。

家に帰って行った。

タカに食べられた。

誰かが助けに来た。

酸性雨で皮膚に湿疹ができてきた。

戦車にしかれた。

タカの所にはっていった。

意見が出つくした所で、この写真の説明を

する。

〔説明〕

この子は女の子で、鳥はハゲワシです
この少女は、この後、ヨロヨロと村の方
へ歩いて行ったそうです。この写真を撮
ったのは、カーターさんというアフリカ
のカメラマンです。アメリカの雑誌にこ
の写真を送り、賞をもらったわけです。
ところが、この写真に非難が続出しまし
た。「カメラを撮る前に、少女を助ける
べきだった」というわけです。

カーターさんは、写真を撮った後、ハ
ゲワシを追い払い、そんな中、少女はヨ
ロヨロと歩いていったそうです。

討論に入る

そこで、次の発問をする。

〔発問〕

「カーターさんは、写真を撮る前に、ま

ず少女を助けるべきだった」という意見
に賛成ですか、反対ですか。又、その理
由は何ですか。

まずは、自分のノートに考えを書かせる。
その間、書けていない子どもたちに助言して
回る。5分程たってから、賛成か反対か聞いて
みると、だいたい半々であることがわかつ
た。

そこで、賛成派から意見を主張してもらう
賛成派「少女を助けるべきだった」

助ければ、体力が回復するかもしれない
から。

一人の人間が生命をなくそうとしている
のだから、助けるべきだった。

写真を撮ることよりも生命の方が大切で
ある。

自分が少女だったら、助けてほしいと考
えるから。

反対派「写真を撮るべきだ」

A 厳しいアフリカで生き抜くには、飢えの経験が必要かもしれない。

B 少女だけを助けたら、他にもいるのだから、不公平になる。

C これも運命なのだから、自分の力で生きぬくべきである。

D 生活がかかっているから、仕事の方を優先させるべきである。

E シャッターチャンスがなくすので、ハゲワシを追いやってただけでもいい。

F 助けてもどこの村の子どもか、と分からないよ。

ここまでで、1時間(45分)を要してしまっただ。子どもたちの要望により、もう1時間延長した。

道徳の授業延長

次時に、討論が盛り上がる。

賛成派から反対派への反論

A ・もう既に飢えを経験しているのではない

か。(反対派のAの意見に対して)

・飢えを体験させる等、もっての外です。

そういう意見は、かわいそうです。

・それなら、日本人も飢えを経験するべきでは。

B 一人でもいいから、助けるべきだと思う

(反対派のBの意見に対して=以下同様)

C 助けてやるのも、その子にとって運命ではないか。

D ・賞と生命、どちらが大切なのだろうか。

・もしハゲワシに襲われ死んでしまったらどうするのか。

・仕事が大事なら、少女の生命はどうなってもいいのですね。

E ハゲワシは追いやって、又いつか来るだろうから、すぐに保護すべきだ。

F その子どもに話しを聞けばいいのでは。

反対派から賛成派への反論

しかし、現に少女は、村の方へ歩いて行ったのだから、いいではないか。

一人だけ助けると、誘拐と怪しまれるか
もしれない。

カーターさんは、助けるために来たので
はなく、写真を撮りに来たのである。助け
るのは、ユニセフ等がやればよい。

話を聞いても言葉がしゃべれないかもし
れないし、そんな体力がないかもしれない。

助けられないのも運命ではないか。

(は賛成派からの反論に対して)

この後も、討論は続いていったが、時間の
関係で途中で打ち切った。新聞記事を読み、
次の指示を行った。

〔 指示 〕

時間もないので、最終的に自分の考え
を感想文として書いて下さい。

子どもたちの感想

感想の一部をここで、紹介する。

僕の意見は、「助ける」である。その
理由は、その少女が自分の目の前で死ん
だりしたら、悲しいからだ。又、自分が
そのような状態だったら、助けてほしい
と絶対に思うはずだからである。その状
態のまま、見捨てられたとしたら、と
ても悲しい気持ちになるだろう。でもカ
ーターさんは、突然そんな場面に出会っ
たのだから、自分でも何をしたらいいの
かがわからなかったと思う。だが、人が
死んでいくのは、誰にとってもいやなこ
とだから、僕は助けるべきだと思う。

私はやはり少女を助けるべきだったの
ではないか、と思います。「助けてもど
うせ死ぬのだからムダ」と言っているけ
ど、後で死んだとしても、いま助けてあ
げたい。他に少女みたいな人々もたくさ
んいると思うけれど、一人でも多くの人

を助けるべきだと思う。同じ人間がそう
なっているのを見捨てるのは、人間とし
てダメなのではないのか？

ぼくは、カーターさんを悪いとも思わ
ない。もし、ぼくがそのカーターさんと
同じ場面に出会ったら、その恐ろしい光
景に足がふるえて、助けてやれないだろ
うと思う。でも、カーターさんはこの事
実を皆に訴えようとして、写真を撮った
のだと思うから、カーターさんは悪くな
いと思う。

僕は助けるべきではなかったと思う。
飢えているのは、この子一人ではないの
だ。村の人々、皆が飢えているのだ。そ
の中で一人だけ助けるとはいけないと思
うのだ。助けるべきだったという人は、

その場面に出くわしてみればいいと思う
本当に助けられるのだろうか。

人間や生命について、少しでも考える機会
になったかなと思った。

道徳外とのリンク

さて、ここで終えてしまってはもったいな
い。学級活動の時間に次の説明から始めた。

〔説明〕

前回の道徳の時間に「助けるか、写真
を撮るか」で話し合い、賛否両論ありま
したが、世界には飢えている国がある
ということ、明日をも知れぬ生命がある
ということはわかったかと思います。

皆は、一日も食べるのに困ったことが
ありませんが、世界にはこのような国が
たくさんあるわけです。何か私たちにで
きることはないでしょうか。しばらくの
間、考えてみて下さい。

皆の意見は「募金」というのに落ちついた。

そこで、次のモノを示してみた。

〔発問〕

これはお菓子の箱ですが、これが実は
役立つのです。さて、何に役立つのでし
ょうか。

「ベルマーク」という意見が出された。私は
箱についているロータスクーポンのマークを
示し、このマーク収集の意味を説明した。

その他、次のような物も示して、なぜ役に
立つのか、意味を説明していった。

使用済みテレホンカード・古切手

そして、次のように訴えていった。

私たちの身近な所で、収集された物が
換金されて、世界の恵まれない国々へ物
資を送ることにつながっていくのです。

学級便りでもこのことを訴えていった。そ

して、学級にはこれが元で、「ボランティア
係」も作られていった。

翌日には、早速3、4名の子どもたちがマ
ーク等を持ち寄ってきた。又、ある女の子は
葉祥明氏の『地雷ではなく、花をください』
(自由国民社)という本を持って来てくれた
そこで、次時の道徳授業は、この本やポスタ
ー(地雷で足をなくしたユニセフの写真等)
を使って学習を進めていった。

道徳から総合学習へ

二 二年より始まる総合学習の前提とな
ったのは、「生きる力」であった。第一次答
申には、こうある。

自分で課題を見つけ、自ら学び自ら考
え、主体的に判断し、行動し、よりよく
問題を解決する資質や能力である。

自らを律しつつ、他人とともに協調し

他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性である。

これらの力を総合学習を中心とした学習で身につけていこうというものである。しかしよく考えてみると、むしろ道徳の授業を核として、図のように総合学習へと発展させられるのではないかと考えて実践をしているところである。さらには、他の各教科等との関連学習によって、「生きる力」が身につくのではないかと考えているところである。

一枚の写真から

現代社会は変化が激しく、かつ情報化の時代である。何より総合学習は、それらにマッチしていかなければならない学習である。ならば総合学習とリンクさせる道徳の教材も従来の副読本中心から決別（脱却）していく必要があるのではないだろうか。

最近の新聞記事によると、道徳教育がマン

ネリ化して、子どもたちが「あれはお話」と冷めているというような趣旨の記事が報道されていた。子どもたちは、多くが道徳は「楽しくない」と訴えているということでもあった。何より「楽しい魅力ある道徳の教材の発掘」が望まれていると考える。

ここで紹介した実践は、ピュリツァー賞を受賞した1枚の写真から授業を進めていったものである。しかし、他にも実物やグラフ資料、クラシック音楽、ポスター、インターネット、書籍等々を中心とした教材構成が大切だと考える。そして、もちろんそれに伴い、授業過程も従来の気持ちを問う授業内容から脱却していかなければならないだろう。

そうすることで、作られた内容の理解ではなく、生き活きとした「生」の理解へと道徳授業が変化していき、ひいては、子どもたちの「生きる力」が育成されていくのではないかと考えている。

